



念佛思想史に對する余の管見（承前）

福 島 瑞 岳

四、日本念佛思想義

予は今日日本佛教史上に於ける念佛思想の義を論ずるに當りお斷りをせねばならぬ事は、支那念佛思想の系統中有名な三種の系統を秩序的に擧げざりし事を實に遺憾に堪へない、勿論それは、支那佛教史の講座に於て更に考慮を深からしめたのである、支那念佛思想を論究せんとするに此の系統を脱せば殆んど其價値を認むる事は出來得ない、然し別條せないが三系統中慈愍流を除く外列記したのである、予は此の系統に依つたのは親鸞上人が念佛系統の最も深い人物をゑりぬいて七高祖とされたのに順じたのであつた。

一般的に云ふ支那念佛思想中心としての三系統は即ち、一は惠遠流、二は慈愍流、三は善導流である、惠遠流は前述の如く、惠遠大師が、東林寺に於て百八十人の同衆と共に盛んに念佛を唱へたと傳へられてゐる是れが即ち觀念々佛とて唯に佛名を稱するのみならず心に佛を觀じ身に禮拜すると云ふ所謂三業相應の念佛と云ふのであらう。

次に慈愍流の念佛なるが唐の初めに印度に流學して慈愍三藏より初めしと云ふも其性質は極めて不明了なりと云ふ、然し其著述に往生淨土集なるものありと云ふが後世一向傳らず故に不明なものである。予思ふに親鸞上人が七高祖中に列記せないのは、其明了を缺いてゐるのと教義の内容等が適確ならざりし爲めであらう。要するに以上の二流は後世に大影響を及ぼさないのみならず慈愍流の如きは形式あるのみである故に佛の歴史上甚しき重要なものではない。

次に善導流は是れも前述の如く曇鸞、道綽を経て善導に來たもので先師の教義を受け有名なる觀無量壽經の疏を著して初めて口稱念佛の意義を大成されしものである。今支那念佛思想上注意すべき問題は往生に於ける二様の意義の存する事である、然かも學者は久しく之を論議し研究し來たのである、即ち一は淨土往生で他は兜率往生である、彼は慾界の衆生は罪惡深重なるが故に直に報土に生れて成佛すること云ふ事は不可能なりと云ふ、然るに彌勒菩薩の兜率天は同じく慾界なるが故に容易に往生する事を得ず、されど彌勒菩薩は當來成佛の佛なるが故に都率に往生する衆生は此の菩薩の保護の元に修行し彌勒成佛と共に一同成佛すると云ふ信仰が都率往生の中心思想である。

次の淨土往生論は彌陀の佛身に就て化身か報身に從つて西方淨土は化土か報土かの争ひが學者間に研究された、即ち化身化土説に依る時は彌陀と釋尊とは勝劣の差あり、又釋迦佛は非坐同居の穢土に居し、彌陀は化土なるが故に相違あるも、然し化土往生と云ふ事は直に成佛を意味せず鈍根の衆生なる故に娑婆世界に於いて多くの誘惑等の爲めに彌陀の淨土往生佛の本に加護されて靜かに修行して成佛する意味が化土往生で是れが彌陀西方往生の化身化土説である、天臺及び嘉祥説は是れに類するものであらう、然し此の方面の學者は別時意趣が兜率往生に對して淨土往生を取るも往生即身成佛は取らない、此れに反する彌陀の報身報土説は、報土に生るゝ事が即ち成佛なるが故に單に兜率往生のみならず絶對に化身化土説に反對するのである、善導が觀經疏等に於いて極力兜率及び化身化土説を斥ふ從つて觀念々佛を否定し佛名を稱するのを最高修行として口稱念佛を大成されたのである。

予今望月博士の説を茲に徴して考察するに、兜率往生思想は最も其根據を有してゐるが、淨土思想説は其根底がない様に思はれる、何んとなれば彌勒當來出現は釋尊が直説と考察してもよい、彌勒が兜率天に住定したのは釋尊の八相成道思想が發達せし後の事であらう。釋尊は嘗て彌勒當來出現説をされしも其彌勒容易に出現しさうもないが故に釋尊が彌勒の假説的のもを直に實現すべく八相成道されたのであると云ふ然らば彌勒の兜率天居住説が確定するに稍近い。

淨土往生思想は其の經路を餘程殊にしてゐる、彌陀の説法聽聞せやうと云ふのは勿論なれど、それは直接の目的でなく、眞の目的は此世界は五濁爛熳の穢土で宛然ら焰々と熾え上る火宅の如くで到底安心が出来ないから、斯かる苦憂の地上を脱し早く安樂淨清な淨土に行き靜かに遊戲雜談に耽げ様と云ふ思想である、然らば誰が考へても彌勒の方は純粹佛教思想の様に見えるが彌陀の方は幾分婆羅門の形式を帯びてゐる様だと論じてゐる。要するに何れの説にしても確實なる典據なき故に信じ得る事は出来ない、然るに善導大師は是等の兜率雜生思想や化身身説及び觀念々佛思想を悉く排斥して唯彌陀佛を稱名すると云ふのを以て最高修行とした處に彼の特長があるのであらう。法然が初め惠信僧都の往生要集を中心としてゐたが遂にそれを捨て、善導大師の觀經の疏に依つて確實なる標的信仰としたのも此の點であらうと思はれる、殊に彼は撰擇集の中専ら善導師に依りて淨土の宗旨建立する事を宣言し、殊に善導の判釋を規矩とせられてゐるのを見ても明らかである。

次に日本佛教史上に於ける念佛思想觀であるが其最初念佛を唱へたのは誰であるかと云ふ事を研究して見ると事實不明である、以來幾多の學者間に於いて説明されてない所を見ると、それが頗る困難な問題の様に思はれるのである。予今考るに佛教が本邦へ傳來したのは、欽明天皇の即位十三年十月十三日と云ふ事は一般の知る所である、此の佛教が盛んに弘通する様になつたのは聖德太子に始まる即ち日本佛教の開祖は聖德太子と云ふ事は略信してもよからう。然らば其の佛教が鸚鵡的に宣佛されたのかと云ふに決してさうではない。太子は自身の頭腦に依つて日本國體思想に相調和し而かも純日本的に化して弘通されたのである、然らば太子の佛教觀に於ける根本思想は那邊にあつたかを考慮する必要がある。要するに佛教の宗旨を何れに求めたかと云ふ事に就いて研究せねばならぬ、従つてそれが根本問題であらうと思ふ、若しも太子をして日本佛教の開祖とするならば其の太子の根本思想は那邊に歸旨してゐたかと云ふ事を推定せねばならぬ、是れが基礎的に解決されなかつたならば従つて日本佛教の中心を失ふは當然であらうと思ふ、然るに一般學者界の説論によると太子に宗旨がない、所謂八宗十三宗の開祖であると太子をして無生命者とし乃至甚しきに至

つては引張鮪の様にして各開祖自己の宗旨である祖師であるとしてゐる、それ實に我田引水の極なるものにして又太子の根本意志を知らぬもの、考へであると云つて敢えて過言ではない。

太子の正妃善岐々郎女病床に就き給ふや、諸王子及諸臣大に憂愁し、共に發願して釋迦牟尼佛の像を安置して熱心なる祈禱をされたと云ふのみならず、法華經に就て深き研究なされた邊から見るも法華經中心思想たる事は言は待たない、殊に、資生産業皆與實相違背の根本思想として御用ひになつた事は一般學者の思想上に於いて共通せる太子觀である。

予思ふに、斯く論じ來る時は勿論太子全體意志は純法華經中心主義者である、何んとなれば太子は攝政の位に在り乍ら政務の傍らに官服の上に袈裟をかけられて三經を講述せられた、即ち維摩經は男性的に法華經の精神を現はし、勝鬘經は女性的に法華經の精神を説示された、此の點から見ると結局法華經の精神を粹拔されたのが太子の佛教觀である、故に釋迦牟尼佛中心主義即ち、佛立宗である。今日蓮聖人の御遺文に依り指摘したら更に明了なるものがある。祈禱書九〇八 上宮太子ノ記ニ云ツ我滅後貳百餘年ニ佛法日本ニ可弘云云。傳教大師延曆年中に叡山を立て給ふ桓武天皇は平の都を立て給き太子の記文たがはざる故ニ云云。と佛陀の眞生命が自己貳百年後に必ず内鑑的宣傳される事を豫言し。又本尊抄九四八 一闍浮提第一ノ本尊可立ニ此國ニ月支震旦未^レ有^ニ本尊。日本國、上宮建^ニ立^ス四天王寺^ヲ未^レ來^レ時以^ニ彌陀佛他方^ニ爲^ニ本尊^一云云。我日本國に本化的本尊の建立すべき其の前提として時未だ來らざるが故に迹門の彌陀を以て本尊とするは近き内に傳教大師必ず出現して本門の實義の顯現するものなりと證し。四條書一六三〇云、御年二歳の二月東に向つて無名の指を開て南無佛と唱へ給へば御舍利掌にあり。云云又中興書一九一八云、同六年に法華經を讀誦し給ふ。それよりこのかた七百餘年王は六十餘代に及ぶまでやうやく佛法ひろまり候て日本六十六箇二ツの島にいたらぬ國もなし云云。等に至つては愈太子の出現は佛陀再誕を表象するの感がある。太子が法華經を中心思想として採用し専ら宣傳されしは佛陀の生命の本質即ち心理的活動を具體的に表現されしものであると云つて敢て過言ではなからう。日蓮聖人は我れは何れの宗旨の開祖にも非らず末葉に非らず釋迦牟尼佛建立し給へる佛立旨

であるが主張されてゐる所は太子の佛立旨思想と相一致してゐる様に思はれるのである。次に太子の念佛觀から次第を追ふて論述せよと思ふが紙數限られてゐるから、更に稿をあらためて述へ様と思ふ。(未完)

(大正十三年、一、廿五)



立正安國論讀後の所感

靜 溟 生

就中日違得生於此土豈不思吾國哉仍造立正安國論云云(六八七)

聖人は常に眼前のみの事柄に囚はれて其れが批判改善を爲さうとせられたのではなく、开を改善せんには須らく先づ其の根源からして改めなければならぬと主張せられた、畢り其の根源と云ふは宗教の信仰の謂にして其の信仰の正邪が所有諸般の現象の上に影響するものであると云ふ固い信念の發露として茲に立正の面目を忌憚なく絶叫せられたのである。

是れ云ふ迄もなく法華經の開顯統一の原理に基く批判眼の光りである、即ち一念三千といふ大調和の宇宙觀人身觀佛陀觀を教へ所有思想を法華經の絶對真理の壺に容れて之を統一しつゝ、一切の思想をして各其の方向を指示して相互の圓融調和の軌道を布き此の深き根底から出發して眞の慈悲眞の報恩の觀念を涌出せしめ、これによつて利害衝突の多き此の現實の社會に一大調和の文化の宮殿を建立せんとする叫びである。

法華經の示す開顯とは即ち開權顯實にして淺薄低級なる思想を矯正して充實深淵高尚の思想を顯現することである。即ち一念三千の絶對真理の高樓に足を止めてこれからして一切の思想批判の觀察眼を放ちて洗鍊し取捨し統一するには必らず足を此處に固く踏み止めねばならぬ、換言すれば妙法蓮華の信念を強く受持せ